

聞名仏教

第 155 号 毎月発行
(発行日) 2023 年 8 月 1 日
発行所: 真宗大谷派念佛寺
〒 663-8113 西宮市甲子園
口 2 丁目 7-2 0
JR 甲子園口駅下車歩 4 分
電話 (0798・63・4488)
(発行人) 土井紀明
<http://nenbutsuji.info/>
アドレス nenbutuji6@gmail.com
ゆうちょ銀行(ドイノリアキ)
記号 17810 番号 7259431

《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉
毎月 22 日 午後 2 時始
(8 月は休みます)
- 〈念仏座談会〉 8 月は休み
毎月 12 日 午後 3 時始
- 〈「聞名の会」法話・座談〉
毎月 6 日 午後 7 時始
- 〈真宗入門講座〉 (副住職担当)
毎月 18 日 午後 6 時 30 分始

ただきもの 佐々木蓮磨

ことでも、わざと喜べぬように考えるのです。例えば、今の蜜柑の話でも見方の悪い人は喜びどころ

か不足をいうのです。

「立派な蜜柑ができましたね」と言えば、「可なりでした。去年の品にくらべると悪いです」とか「近所の品にくらべると見劣りがする」とか、いろいろと不足の絶えることはありません。全く浮かぶ瀬がないということになります。

人間の幸と不幸とは、一般に外から来るように考えられておりますが、この考え方は反省の余地があると思えます。現代はすべてを客観的、物質的に割り切ろうとする傾向が強いので、精神的な面から幸と不幸を考える余地がないように察せられます。これはまことに不幸なことだと思えます。

客観的のものも物質的なものも、それに対する見方、受けとり方によって、価値の変化を来たす場合が随分あります。従って人間を幸と不幸に導く鍵は外部にあるのでなくて、むしろ人間自身の胸三寸にあると言っても過言ではないでしょう。見方の悪い人は、喜べる

なりました。そこでこの立派な蜜柑も、全く他力のお陰でできさせていただいたと喜んでおります」と答えられたのであります。私は「なんだか負うた児に教えられたような感じがしました。

私などはこうした意味のことは、常に口で言っておるのですが、身につけていないのです。ところが、この田舎の無智な同行は、立派に身につけているのに驚きました。

そこで私は、その同行に申しました。「あなたは何という幸福な人でしょうか、喜びを二重に頂いております。立派な蜜柑ができましたという喜びと、その蜜柑ができたのも他力のお陰であるという喜びとを頂いているではありませんか。このようなと、またこの蜜柑も御恩の賜物だから、粗末にしてはならぬという物を大切に

私の地方は海岸ばたで魚類もとれるが、柑橘類が相当にできる土地であります。先年、ある海岸の一部落の檀家に参りましたところ、その家の主人が、見事な蜜柑をお盆にのせて出してくられたのであります。そこで私が「なんと見事な蜜柑です。これはおうちの畑でできたのですか」と尋ねましたところ、その主人が「われらには、もちろん私の畑にできた蜜柑ではありませんが、私が作ったとは思いません」と答えられたので、私はちよつと面食らつて「それでは誰が作ったのですか」と尋ねたところ、その主人の返事がまことにありがたのです。「ご院家さん、私がこんなことをあなたに申し上げるのは釈迦に説法ですが、私は仏法をきかせていただいたお陰で自分の力というものを考えぬように

対話編

『浄土真宗』

1

(1) 『人間の成立根拠』

A 「浄土真宗はどういう教えかということについて、基礎から問答形式でお話ししたいと思います。真宗は宗教ですから人間の救いについて説かれています」

B 「宗教ということですから、人間が救われることですね。その場合、まず、救われるべき人間とは何かという点があります」

A 「人間とは何かというところで、これを一般化すると非常に広くなりますので、それを現実に生きている私というところで、救われねばならない私とは何かからお話しいたします。生きている私とは何かということ、具体的に考えるのが一番分かりやすいですから」

B 「具体的に生きている私、それは何かということですね」
A 「ええそうです。そこで、

生きている私はいつでも今にしか生きていません。昨日の私はもういません。明日の私を頭で考えることはできませんが、実際には明日の私は現実には存在しません。生きて存在している私は、過去にも未来にもいません。いつでも今でしか生きていません。今、今と一瞬一瞬存在している私です」

B 「一週間過去の私も、一週間先の私も、頭で考えることはできませんが、そういう私はただ頭で思っている私にすぎませんね」

A 「今、今に生きている、というか今という現在にしか生きることはできないという限界があります」

B 「人は常に今にしかいないという限界に生きているのですね」

A 「ええ。そして同時に此処こゝにしか生きていません。アメリカにいるのでもなければ、中国にいるのでもあり

ません。日本の西宮市のごく限られた場所のここに生きています」

B 「私はいつでも、今ここにしか生きていないし、今ここという限界にしか生きられないのですね」

A 「そうです。ただし、今ここに生きるだけで十分なのです」

B 「今ここに生きているだけでいいのですか」

A 「今ここに生きているというか、生かされている、置かれている、という厳しい限界は不幸なことではなく、逆にそこにこそ安定があり、支えがあり、自由があるのです。今こここそ真に落ち着いて生きれる場所です」

B 「今ここという場所は変えられた場所なのですね。今ここにいるのは私だけですか」

A 「いいえ、あなたも彼も、

人々も、さまざまな生き物や諸物も、一切が今ここに存在しているのです」

B 「あらゆるものが今ここにおいてのみ存在しているのですね」

A 「ですから、私が今ここにいるというのは今ここに

ある万物、世界そのものと共に今ここにいるということです。一年前の世界はもうありませんし、一年後の世界はまだありません。私にとって世界は、いつでも今ここにある世界です」

B 「私にとっては、ということですね」

A 「ええそうです。そして大事なことは、いつでも私が今ここにいるということ、私の力でそうになっているのかというところはありません。今ここにいる私の存在は、私の善悪の行為に依ったり、私の考えに依って存在しているのではありません」

B 「私の考えや思いに依って生きているのではなく、我ならざるはたらきに依って生きているのですね」

A 「ええ、私という自我以外のはたらきによって存在しているのです。このことを自覚し、そこにアマダ仏を見出したのが真宗大谷派の先覚者清沢満之（一八六三〜一九〇三）でした。師は、

自己とは他なし。絶対無限の妙用に乗托して、任運ほうにに法爾ほうにに此の現前の境遇ほうにに落在せるもの、即ち是なり。

『清沢満之先生の言葉』、永田文昌堂、一九七七、四六頁

と書いています」

B 「〈現前の境遇〉というのは、今ここにということですね」

A 「ええそうです」

B 「今ここにいる存在が〈絶対無限の妙用に乗托して〉というのはいえましょう。そのはたらきに乗托してはじめて存在できているということ、乗托してとは、無限のいのちのはたらきに依って、その上ではじめて存在できているということですね」

B 「任運に法爾に」とは」
A 「私の力や計らいに依らず、その無限ないのちのはたらきによって自然にそうなっているということですよ」

B 「落在して」とは」

A 「無限ないのちのはたらきに一瞬も離れることなく置かれてあるということですよ。そういう意味ではそのはたらきから逃げることも離れることもできないし、逃げる必要もなく、離れる必要もなく、有り難いことに結びついていて、そこそこ私の本当の居り場がすでに与えられているということですよ」

B 「その絶対無限の妙用について、そこ今ここで掴まれて、そこから一瞬も離れることもできないほどに一つになつていて、そこにこそ私の本当に居ることのできる、有り難い場所だということですよ」

A 「ええそうです。私が本当におられる場所です。誰からも、どんな権力も、病気も失敗も、自然の災害も、何によつても私をこのいの

ちの場所から引き離すこと

ができない、そういう場所につねに私は置かれてあるのです。そこそこ私の安らげる場所であり、生きる力が湧いてくる場所であり、全ての人や物とであえる可能性のある場所です。そういう恵みの場所が、任運に法爾に、すなわち、私の行いや考えや努力に依らないで、まったく無償にいつでも今ここに与えられているのです。この場所はいつでも人生をそこからやりなおしのできる場所なのです。私の行いの善し悪や能力の有る無しに依らず、私を抱いてくださっている場所ですよ」

B 「現代よく、自分の本当の居り場が分からないという人がたくさんおられますが、実は今ここに誰にでもすでにそれは与えられているのです」

A 「ええそうです。清沢師は絶対無限の妙用について、

宇宙万有の千変万化は、皆是れ一大不可思議の妙用に属す。

とか、

一色の映ずるも、一香の薫るも、決して色香其者の原起力に因るに非ず。皆彼の一大不可思議力の発動に基くものならずばならず。とも表現されています。そして、

現前一念における心の起滅、亦自在なるものにあらざ、我等は絶対的に他力の掌中に在るものなり。

とまでいわれています。すなわち、ひと思いの起るのも消えるのも、自分の力で動いているのではないのです。徹底して我ならざる一大不可思議によつて動いているのです。いわば、このはたらきの外に私ということのは無いということですよ」

B 「絶対無限の妙用」のことを無限ないのちのはたらきといわれましたが、それは、意識の活動を含めて宇宙全体の活動といえるのでしょうか」

A 「ええそうです。単なる物質的活動のみならず、

意識の活動の全体を含めて、

一大不可思議の妙用と清沢師はいわれています」

B 「万物をして万物たらしめているはたらきなのですね」

A 「ええ、それで清沢師は絶対無限の妙用を無限の能力ともいい、このはたらきを阿弥陀如来のはたらきと領解されています」

B 「そうすると真宗というアミダ仏は万物をして万物たらしめている、存在の根源的なはたらきと見られているのです」

A 「ええそうです。アミダ如来の基本的なはたらきをお聖教では、光明無量・寿命無量と説かれています。光明無量についてはくわしく説かれています。寿命無量については多くは説かれていませんし、親鸞聖人も寿命無量に触れることは非常に少ないですね。そういう状況の中で、清沢満之師は、寿命無量を無限の能力と押さえられました」

B 「アミダ仏は無限のいのちのはたらきとはいうことですよ、それは『正信偈』

の最初の無量寿如来にあたりますね」

A 「ええ、その無量寿如来は私たちの存在根拠であることと領解されます。ただこのことに気づいていないところに迷妄があり、妄執があつて、それが流転の因となつて長々と流れ転がつてきた私たちであるといわれるのです」

B 「この私の存在の成立根拠であるアミダ如来を知らず、生まれて生きて死ぬはかない身だけが私だと思いで生きているのを迷いというのです」

A 「ええそうです。ですから救いとは、この無量寿のはたらきにあい、このはたらきが生の依る処であり、死の帰する処と知らせていただくことなのです。帰命無量寿如来の帰命というのはそういう場所に帰することであり、この場所においてこの世間を生きききつていくのです」

B 「以上のようにお聞かせいただきとアミダ仏を身近に感じられます」

信心夜話

話を何度も聞くことになりす。こういう説教を聞いてお念仏を申すのです。そしてお念仏申すつつ、お念仏のいわれを何度も聞いていけばいつかはハッキリと聞き開かれる、あるいは目覚められる、あるいは信心が頂けると思

聞法です。「聴聞し念仏すればいつかは阿弥陀仏にあえる、信心が頂ける、そして楽になれる」という自我心があるのです

自我が全否定されるのです。「助かる」のは自我が否定されるということを通してアミダ仏に出遇うのです。(了)

に仕上げて、これで間違い無いと信をもつて、他の巻担当の編集者に見て貰ったら、実に多くのミス指摘された。いささかうんざりしたが、何事に付け自分に対する自己評価がいかにか危ういものであり、自分に対してうぬぼれているかを知らされる。大体私はいささか知らされ

大谷派のお説教でよく「アミダ仏は私たちを生かしてくださっている、そのアミダ仏が南無阿弥陀仏と名告

つてくださって、私たちに思いを超えた事実気づかせてくださる」とか「私たちは如来の内なる存在であ

て行くほかないのですが、その延長上にアミダ仏にあえるかという、不可能という壁にぶつからざるを得ないので。

【住職雑感】大きなサイズのTVを買って以来、従来のテレビ番組は殆ど見なくなって、youtubeの動画を見る。ニュースは勿論、さまざまにジャンルの動画がupされているのに驚く。たとえば、日本内外の旅行がリアルで大きな画面で見れるから、あたかも現地にいるような体感

折られる過程であり、愚かさが身に沁みる年月になる。長生きする功とは、だんだん立派になるのではなく、自分の愚かさを知らされることである。自分の愚かさが知らされるに比例して、こんな自分への目に見えぬ冥加が大きいことも同時に知らされる。

られることが多々あります。確かにその通りであり、私も同じように云う場合もあります。

お念仏を申し、お念仏のいわれを聞いていけば、アミダ仏の喚びかけに気づいて、自分がアミダ仏に撰め取られている身であると知ることができると思っています。

ただし、この「不可能」という壁こそが実は大事なのです。不可能の壁にぶつかって、「もはや我が力では信心は得られない、真

真宗学の幡谷明博士の『講演集全七巻』の出版予定の内、第四巻の編集を受け持つからほぼ一年間、合間あいまに作業を進めて、この6月

冥加が大きいことも同時に知らされる。冥加が大きいことも同時に知らされる。

あるいは本願寺派の説教で、よく聞かされる南無阿弥陀仏のお心は、アミダ仏の本願力が私たちに「助ける」「引き受ける」「浄土に連れて行く」との仰せです

ただ、お説教を聞けばどうしても、聴聞をしてお念仏をしておれば、いつかはアミダ仏（真実そのもの）にであえると思つて努力するように自ずからなります。

それが十九願、二十願の姿ですが、こういう聞法はやはり自我が主体となつての

《二〇二二年度東本願寺基金御懇志報告》

懇志者名(敬称略) 青木宏克 赤股弘子 秋常芳子 浅野真由美 足立美明 石川紀美子 伊東清文 稲田富恵 井上守 岩谷龍 岩田能一 植田節美 宇田聡 小澤譲 小畑住子 改發正浩 香川郁夫 加藤忠鹿 野良子 萱島聖志 假屋八千子 川端靖雄 喜多真澄 窪ナル子 児玉慶子 佐藤孝幸 下野誠二 島田千づる 白石千鶴子 城越香織 寿賀晴剛 関有江 高田幸子 高田公子 谷村征世 津田衛一郎 土居令子 長井一江 中川政二 中野タカ子 中村暢明 中村穂積 中村ホミ子 中村匡子 中村幹夫 西塚祥子 西山恭夫 能登昇志 野原佳子 長谷川満 泰京子 濱秀子 原崎佳水 平田幸子 福村義明 町百合子 三浦一浩 三宅真知子 宮野勲 宮野道子 室塚良治 森野茂治 山下悦子 山下絹子 山下秋喜 山田節子 山下東洋栄 山科瞳 吉岡正人 吉田徳子 吉ノ菌睦枝

「南無阿弥陀仏のいわれ」といえます。ですからお説教を聞くところ

それが十九願、二十願の姿ですが、こういう聞法はやはり自我が主体となつての

以上、皆様方より御懇志を賜りました。大谷派(東)本願寺の方に納めさせて戴きます。有難うございました。

合計(総額) 二二六〇〇〇円

合掌